

国際青年

2015年(平成27年)11月1日発行

第41号

埼玉国際青年を育てる会・会報

Saitama Association for International Youth Volunteers

協力隊を支援し続けて20年

★平成27(2015)年度定期総会

平成27(2015)年5月30日(土)

国際交流基金 日本語国際センター



「開会の挨拶」星野和央会長

埼玉国際青年を育てる会が設立20周年を迎えた記念すべき総会です。例年、総会の日には真夏のような天気でしたが、今年はさらにすごい暑さでした。開会の挨拶をした当会の星野和央会長は「暑い暑いとは言えない。派遣される隊員たちは、もっと暑い所や厳寒の地にも行くのだから」と切り出した後、当会の歴史に触れ、20年前には全国でも「育てる会」は多くなかったなどと振り返りました。

そして、隊員たちが帰国後、自分の経験を若い人たちに伝える出前講座の意義を語るとともに、当会の会員を増やしていかなければならないと強調。隊員のご家族が入会された場合は、隊員の帰国後も会に留まっていたくように、また隊員自身にはOB会があるけれど、「当会にも入って一緒に活動しましょう」と呼び掛けていました。

この後、当会の井上泰一事務局長による議事進行で5つの議案が承認されました。続いて来賓からのご挨拶。

埼玉県庁国際課長の小池要子さんは、県がグローバル人材の養成に取り組み、隊員が日本に戻ってきたら経験を生かして活動できるように、就職支援を含めて応援していることを話され、それへの理解も求めています。

一般社団法人協力隊を育てる会常任理事の奥永眞智子さんからは、当会が会報の発行を継続し、多くの人に配布していることへの敬意が表されました。青年海外協力隊50周年に向けて記念誌を作製しているそうですが、そこでも「持続するというのを大きく取り上げたい」と、熱い思いを語っていました。

★創立20周年記念講演会

定期総会の後、同じ会場で記念講演会が開催されました。昭和58(1983)年2次隊でアフリカ南部のザンビアに派遣された江原浩彰氏が演壇に立ちました。

エチオピアで学んだ食への敬意

ザンビアでの主任務は現地市役所が管理する農場での野菜栽培でした。帰国後、筑波大学の修士コースで環境科学を専攻、ゼミの指導教授が代表を務めていたNGOのスタッフとして今度はエチオピアへ行きました。国土の大部分が高地で、私がいた標高2500メートルの地域では当時の主要な通信手段は大きな声を上げることでした。大声は3キロ先に届くので、そこからさらに大声で3キロ先に伝えるということを繰り返すのです。

この国は1980年代に旱魃による飢餓で100万人が亡くなったとも言われ、私は旱魃からの復興を地域の人々とともに考え、活動することになりました。食糧支援と並行して、植林、栄養改善、

● 41号目次 ●	・平成27(2015)年度定期総会……………1	・現地レポート……………4～6
	・創立20周年記念講演会……………1・2	・青年海外協力隊50周年の歩み……………7
	・新入会員のご紹介……………2	・小さなハートプロジェクト……………7
	・平成27(2015)年度壮行会……………3	・青年海外協力隊発足50周年記念式典……………8

井戸の整備に取り組んだのです。

エチオピア人はイスラム教徒とキリスト教徒が半々くらいですが、「食べることに敬意を表さないのは野蛮人だ」という意識は共通しています。「誰が作ったかわからない物は食べられない」というわけです。貧しくて食べ物も少ないのに、客が来たら必ず食事を出してくれます。

日本に帰ってからもエチオピアの支援に関わる仕事に携わりました。この時にアジアのタイやカンボジアでの自然農法に触れたのがきっかけで有機農業を始めることになりました。日本の有機農業は1980年頃から始まり、消費者によって支えられてきました。

私たちのガバレ農場は吹上町（現在は鴻巣市に編入）にあります。ガバレとはエチオピア語で農民の意です。田圃に60～70羽の合鴨を放つと、虫を食べたり、草を取ってくれ、無農薬の米ができます。稲刈りをした後、合鴨をみんなで食べます。合鴨は人間によって作られた雑種で自然界には存在しないため、放鳥が禁じられているからです。



ガバレ農場にはいろいろな人たちが訪れます。大学の先生、農林水産省の職員、そして地元の人たち。土を触ったことがない子どもたちは、大根が土の中で育つのかを見てびっくりします。八百屋やスーパーでしか大根を見たことがないのですね。海外からも若い人たちが訪ねてきます。

これからの農業は「大規模化」と「こだわり化」という2つが柱になるでしょう。こだわり化とは有機農業や自然農法、あるいは高級な商品を作るなどユニークな農業を進めることです。

私の活動は青年海外協力隊の経験が基になっています。協力隊の役割には、当事者には見えないことを見るということがあります。他者としての視線を生かすのです。だから協力隊OBをもっと有効に活用したほうがよいでしょう。地域のために、協力隊の時の活動のようなことをしてもらいたいのです。



江原氏の記念講演の後、総会のプログラムにもなかった特別講演が付け加えられました。講師は平成26年度4次隊でネパールに派遣された管理栄養士の仲野智子さん。

着任して間もない4月25日にマグニチュード7.8、さらに5月12日に同7.3の大地震に襲われ、この時点で8000人を大きく上回る人々が亡くなり、仲野さんも一時帰国を余儀なくされました。カトマンズにいた彼女が撮った地震直後の写真は衝撃的でした。

ネパールの人たちからは東日本大震災からの日本の復興についてよく聞かれるそうです。ご本人も当時、被災地の宮城県石巻市に行って活動したこともあり、「被災者の心の状態、食の事情について経験を生かして取り組んでいきたい」と覚悟を語りました。翌週にはネパールに戻るという仲野さんが持参した募金箱には、会場の人たちから次々に義援金が入れられていました。

お2人の講演の後は懇親会が開かれました。瀬島孟副会長の乾杯の音頭で飲み干した冷たい飲み物が格別に感じられたのは、暑さのせいだけではなかったはずです。



(山田洋)

新入会員のご紹介（40号発行以降入会の方）

谷 中 敦 子（幸手市）

黒 須 琢 也（白岡市）

★平成 27(2015)年度壮行会

■ 1 次隊壮行会

平成 27 年 6 月 23 日（火）

さいたま商工会議所会館 1 階ホール



夏至も過ぎ、梅雨の合間の曇りのなか、埼玉国際青年を育てる会と青年海外協力隊 OB 会の主催による 1 次隊の壮行会が和やかな雰囲気の中開催されました。

育てる会星野和央会長の主催者挨拶にはじまり埼玉県国際課和田公雄副課長、JICA 東京地域連携課の佐藤俊也課長から激励のことば。そして派遣されるみなさん全員 19 名（青年海外協力隊 13 名、シニアボランティア 5 名、日系社会青年ボランティア 1 名）からの決意表明。

派遣地域はアジア 8 名、アフリカ 4 名、大洋州 4 名、南米 3 名、なかには 4 回目の派遣というシニア海外ボランティアの方もいました。

そして、懇親会では協力隊 OB 会のみなさんからの経験談や、参加されたご家族からの一声が披露され、隊員たちも相互の情報交換に余念がありませんでした。

不安を抱えている隊員もいたでしょうが、「元気一杯」を前面に表現した、活気溢れる壮行会でした。

今回は珍しく、壮行会終了後、埼玉県庁へ行き知事表敬訪問とのことで、少し緊張気味の隊員たちでしたが、7 月初めから任地に向け旅発っていくそうです。（高野直明）

■ 2 次隊壮行会

平成 27 年 9 月 25 日（金）

埼玉県知事公館 2 階会議室

埼玉国際青年を育てる会

青年海外協力隊埼玉県 OB 会 共催

埼玉県 後援

小雨降る金曜日の午後、会場は当会創設以来はじめての埼玉県知事公館。素晴らしい会場の雰囲気の中、27 年度 2 次隊員として青年海外協力隊 (JV) 16 名、シニア海外ボランティア (SV) 3 名、

合計 19 名（1 名欠席）が参加し開催されました。

当会星野和央会長が、埼玉国際青年を育てる会の趣旨や日本の文化や伝統をきちんと把握し、国際協力に励んでほしいとあいさつ。来賓として埼玉県国際課小池要子課長より、知事公館の由来や、海外で働いた経験者の採用枠や教員採用加点制度などの概略説明とはげましのおことばがありました。また、JICA 東京の地域推進課佐藤俊也課長から、「安全と健康」を大事にし、現地オフィスとの連携を図りつつ、JV50 周年、SV25 周年と区切りの年に派遣されることを誇りにがんばってほしいとのあいさつがありました。

その後、情勢不安のため急遽任地変更となった隊員を含め、参加隊員全員から、元気よく「自己紹介と決意表明」があり、当会瀬島孟副会長の発声で乾杯。

そして、スタッフや先輩 OB を含め約 40 名が和気あいあいと懇談し、任地の情報交換や趣味に話の花を咲かせていました。



協力隊埼玉県 OB 会榎本敬会長をはじめ 4 名から、赴任中の出来事からの注意点や健康への留意点など丁寧なアドバイスがありあした。

多忙のなか、急遽会場に来てくださった塩川副知事からも励ましのことばをいただきました。

最後に、隊員を代表して川越市出身の川腰友里奈さんが「応援してくれている方を忘れず、2 年間で大切にしたい」と語っていました。

・派遣地域は北・南アメリカ 6 名、アジア 3 名、アフリカ 8 名、大洋州 2 名

・派遣職種は、環境や日本語などの教育関係 6 名、コミュニティー開発 3 名、PC インストラクター 2 名など 13 種類の専門分野の方々（高野直明）



現地レポート

■横山祐樹（さいたま市）

25年度4次隊 モンゴル JV 環境教育

モンゴル・ウランバートル市ゲル地区での活動報告

С а й н б а й н а у у ? (サイン バエノー?) : お元気ですか ?

モンゴルの一日はこの挨拶から始まります。ゆったりとのんびりとしたモンゴルの一日がとても長く感じるのは、日本より日照時間が長いからなのでしょう。夏は夜22時頃まで明るいのです。私はモンゴルのウランバートル市に環境教育隊員として派遣されています。残りの任期が半年となりましたが、これまでの活動についてご紹介したいと思います。



活動しているゲル地区

ウランバートル市の中心部では都市化が進んで経済成長が著しい一方、郊外では「ゲル地区」と呼ばれる地域が年々広がっています。「ゲル地区」とは、地方から首都に移住して来た人、生活水準の違いから中心部での生活ができない人、仕事もお金も無い人、が生活している地域です。貧困層が住むスラム地域とも言われており、環境汚染が深刻化していることから環境教育隊員として「ゲル地区」での活動をスタートしました。まずゲル地区の状況について、以下にまとめました。

- ・ポイ捨てが当たり前
- ・全世帯がボットン便所
- ・上下水道は無く、井戸水か川の水を使用
- ・冬は石炭を焚いて暖を取るため空気が汚れる
- ・コミュニティがほとんど無い
- ・家庭や個人の事情で学校に通えない子どもがいる etc.

土壌・地下水・大気汚染が進行している「ゲル地

区」住民の衛生環境と健康被害について、日本人にとってはなかなか想像できないものだと思います。そんな劣悪な状況を少しでも改善すべく、以下のような活動を行っています。

- ・「ゲル地区」での協力者と連携
- ・子ども向けの環境啓発活動→授業というよりはゲーム感覚のアクティビティー
- ・植樹や花植え
- ・先輩隊員と共同で「コンポスト・トイレ」を設置
- ・生ごみコンポストの普及活動
- ・廃材を利用したリユース商品の開発の提案 etc.



協力者たちと子どもたち向けの
環境教育活動を行ったとき

「ゲル地区」住民にとっては日々の生活を送ることと精一杯であるかもしれないですが、少しでも環境保全に目を向けてもらい、自分の任期終了後も、自発的かつ継続的に行う人材が育ってくれることを願い、最後まで任期を全うしたいと思います。
(2015/09/9)

■木村進（所沢市）

25年度4次隊 セルビア S V 経営管理

セルビアでのカイゼンプロジェクト

今回のプロジェクトはカイゼン活動のベースとなる5Sカイゼン（注1）を導入することで1年間の活動を行ってきました。

対象はセルビアの製造業12社で、従業員40人から600人、業種は看板製作、鍛造、鋳造、機械加工、ケーブル製造、車両製造等十岐に亘りました。導入のために各社を訪問し、経営者の方との面談そして現場の人々を対象に各ステップの説明と現場での指導、視察を繰り返しました。訪問回数は110回を超え、プレゼンテーションは140回、移動距離は2万3千キロを超えました。セルビアでの移動手段は原則車で北から南へと動き回りました。

5Sカイゼンは職場を綺麗にすることではなく、

自分の職場を自分達で働きやすく変えてゆくことを通じて働く人々の意識改革が最終目的です。

最初に各社の5Sを導入する目的を明確にしてもらいました。目標は社内コミュニケーションの改善、コストダウンによる競争力アップ等現状をより良くすることでした。その後5Sカイゼンをステップを追って展開してゆきました。

この活動は日本人だから出来るというイメージを払拭するため、導入に当たってセルビアの日本たばこ産業（JTI）の協力を得て工場見学から始めました。JTIは既に7年に亘って5S活動を進めていますが、全てセルビア人の手で進めていて、しかも現時点でも進化をしています。又セルビアの企業文化も異なりますがこれは5Sを進めてゆく中で克服できるものだと思います。

5Sカイゼンでは現状の制約を認めたくて、その状態を如何に良くするか（カイゼン）です。カイゼンプロジェクト対象企業の皆さんは、現状を良くしたいという意欲を持っておられたので、5Sカイゼン理論の理解、実践に躊躇はありませんでした。理論は簡単ですが、実際にやるのが重要です。やることで皆さんのモチベーションが芽生えてくるのです。



改善前



改善後

セルビア製品の製造コストは安く競争力があるかもしれませんが、顧客は品質、納期にも多くの期待をします。5Sカイゼンは工場が管理された状態を作り出します。管理された工程には品質、納期も信頼が置けると判断されると思います。

製造業はイノベーションが必要ですが、5Sカイゼンで現場の管理と変化を受け入れることが出来る人を育てておくことも必要です。こうした活動で企業は儲けて、そしてその利益のいくらかは従業員の方と分けあう企業が増えることを期待します。

最後に今回セルビア企業の5Sカイゼン導入をお手伝いできたことはとても光栄です。5Sカイゼンは企業経営のベースとなるという考え方を理解していただく手助けになったかと思います。

(2015/08/24)

注1；5Sカイゼン；職場環境で用いるスローガン。「整理、整頓、清掃、清潔、しつけ」の頭文字から

■吉田 翼（さいたま市）

27年度1次隊 ネパール JV 野菜栽培

ネパールで復興支援

ネパールに来ておよそ2ヶ月が経つ。生活や環境そして、ネパール語にも慣れてきた。私はネパールでの野菜栽培の活動と共に震災被害について写真を撮ってきた。ネパール大震災からおおよそ4ヶ月が経つ。2015年4月25日に起きたネパールで史上2番目に大きいマグニチュード7.8の地震により、死者8,500人弱、負傷者1万5,000人そして被害総額5兆円にも上った。活動のことはもちろん、この状況を忘れてしまってはいけないと感じたため紹介したい。

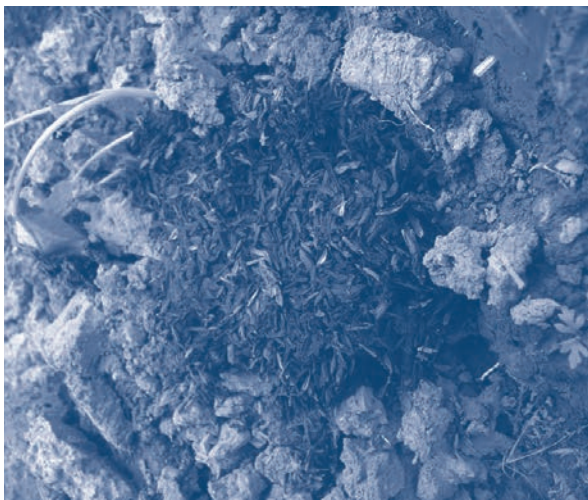
1. カリフラワーの定植①

土地が痩せていて、水が少ない。そのうえカリフラワーの苗が徒長している。日本とは違う環境下にどこから教えるのがいいのかと現在、手探り中である。



2. カリフラワーの定植②

鶏ふんともみ殻を混ぜて発酵させている肥料をまいてある写真。しかし、日本では土にすき込ませるが、ここでは定植した後にかぶせる形でまいていた。一応有機栽培になる。



3. カトマンズ ダルバード広場（世界遺産）の被害状況

古い建物が多いネパールではいくつかの観光地が崩壊している。今も警備員がおりなかなか復興が進まない状況。8月に何回か小さい地震が来た。そのときの私は家の中にいたが外がざわざわしていた。今なおネパール人は地震の不安を感じている。



4. バクタプールのガイジェトラ

ガイジェトラは日本でいう「お盆」で、亡くなった人のお祭り。私の活動任地バクタプールで行われた。いつもは観光客も減って閑散としている場所だがこの日だけは活気に溢れていた。また、バクタプールも震災の被害が大きく亡くなってしまった人も多い。

そのため、今年行われたガイジェトラは特別だったという。



(2015/9/9)



入会のご案内

当会では、随時会員を募集しております。ぜひお友達を紹介してください。申込書などは事務局までお気軽にお問合せください。

【年会費】

- ①個人会員：一口 3,000 円
- ②団体会員：一口 10,000 円
- ③法人会員：一口 20,000 円
- ④ご 寄 付：大歓迎

●会報「国際青年」に 原稿・写真の提供のお願い

会報「国際青年」を毎年5月および11月に発行しており、原稿を募集しています。

- 派遣される方については、派遣先での活動の様子を原稿と写真でお寄せください。「現地レポート」として、掲載させていただきます。タイトルを含め、原稿の字数は最大で600字程度で写真は2～3枚をお願いいたします。なお、一言コメントでも結構です。
- 留守家族の方も、家族の思いなどをメールやFAXでお寄せください。
- 会員のみなさんも、「読者の声」や近況そしてご意見をメールやFAXでお寄せ下さい。
- 会報は、海外の派遣先でも読んでいただけるようホームページにのせさせていただきます。

★青年海外協力隊 50 年の歩み

戦後20年が過ぎ、日本が高度経済成長を達成しつつあった1965年4月、開発途上国への技術協力、相互理解、青少年育成を目的として、「日本青年海外協力隊」が創設され、12月には5人の若者から成る1次隊が派遣されました。初めて日本でオリンピックが開催された翌年のことでした。

以後、草の根外交官として、規模と内容を発展させて受け継がれ、現在に至っています。その50年の歩みを振り返ってみましょう。



最初の派遣隊員5人の訓練

- 1954年 日本のコロンボ・プランへの参加をきっかけに政府開発援助（ODA）がスタート
- 1965年 日本青年海外協力隊事務局を開設、局長を含めてスタッフは7人
選考試験に463人が応募し、初の協力隊員5人を派遣（ラオス）
- 1966年 カンボジア、マレーシア、フィリピン、ケニアへ35人を派遣
- 1968年 第1回帰国隊員報告会で隊歌「若い力の歌」が発表される（作詞・山田哲 補作詞・藤田まさと 作曲・古関裕而 歌・藤山一郎）
広尾訓練所（東京都）を開所
中米に協力隊員派遣を開始（エルサルバドル）
- 1972年 大洋州に協力隊員派遣を開始（西サモア）
- 1974年 国際協力事業団（JICA）が設立される
日本青年海外協力隊を青年海外協力隊と改称
- 1975年 協力隊創設10周年の記念映画「アサンテサーナ わが愛しのタンザニア」が完成
- 1978年 南米に協力隊員派遣を開始（パラグアイ）
- 1979年 駒ヶ根訓練所（長野県）を開所
- 1985年 青年海外協力隊20周年式典を開催
日本の青年の中南米への移住促進を目的とした海外開発青年を創設
- 1990年 青年海外協力隊の派遣隊員総数が1万人を突破
40歳以上を対象にしたシニア協力専門家と移住シニア専門家を創設



発足間もないころの出発風景

- 1992年 東欧に協力隊員派遣を開始（ハンガリー）
- 1994年 二本松訓練所（福島県）を開所
- 1995年 青年海外協力隊30周年記念式典を開催
- 1996年 シニア協力専門家をシニア海外ボランティアに、海外開発青年を日系社会青年ボランティアに、移住シニア専門家を日系社会シニア・ボランティアに改称
- 1997年 国際ボランティア会議に初参加
- 2000年 青年海外協力隊の派遣隊員総数が2万人を突破
- 2003年 JICA が独立行政法人国際協力機構に
- 2005年 青年海外協力隊40周年記念式典を開催
国際ボランティア会議を日本で開催
- 2007年 青年海外協力隊の派遣隊員総数が3万人を突破
- 2010年 JICA ボランティア全体の派遣総数が4万人を突破
- 2012年 日本の民間企業と連携して現職社員を派遣する民間連携ボランティア制度を創設
- 2015年 青年海外協力隊50周年記念祝典を開催
青年海外協力隊50周年記念映画「クロスロード」を公開（監督・すずきじゅんいち 主演・黒木啓司）
－写真提供：JICA－ （山田 洋）

★小さなハートプロジェクト

西アフリカの別々の国に派遣されている埼玉県出身の2人の隊員から、ともに小学校のトイレ設置にともなう経費の補助の申し込みが一般社団法人協力隊を育てる会にきました。

内陸のブルキナファソの江田慶子隊員（平成25年度3次隊 コミュニティ開発）と大陸最西端セネガルの澁谷道嗣隊員（平成26年度1次隊 教育行政・学校運営）からで、トイレがなかったり、あっても壊れていて使用不能の状態にあり、生徒たちは草むらですませたり、そのたびに帰宅したり、あるいはじっと我慢するしかないそうです。健康面、そして衛生啓発のためにもトイレの必要性は明らかで、埼玉国際青年を育てる会としては計3万円の補助をいたしました。

ヒトも変わる・世界も変わる

—青年海外協力隊発足 50 周年記念式典—



紅葉の燃えさかる日本の秋。11月17日(火)、青年海外協力隊発足 50 周年記念式典が横浜市みなとみらいにあるパシフィコ横浜で行われた。

天皇・皇后両陛下が御臨席されたこの催し、全国から約 5000 名が参集し、わが「埼玉国際青年を育てる会」からは私や瀬島副会長をはじめ十数名の役員が出席した。

記念式典は両陛下の御臨席もあり、入場には緊張を覚えた。新聞報道によると、式典に先だち 24 人の帰国隊員らと懇談し、一人ひとりにねぎらいのお言葉をかけられたという。

式典は二部構成で、約 2 時間半にわたって行なわれた。総合司会は“放送”でブータン派遣の中村康人君と“環境教育”でミクロネシア派遣の高柳恭子さんが担当。両陛下の御着席の後、主催者である独立行政法人国際協力機構の北岡伸一理事長の式辞。ついで内閣総理大臣祝辞を木原誠二外務副大臣が代読し、衆議院議員額賀福志郎氏が JICA 議連(80 人)会長として登壇した。異色だったのはビデオメッセージとして第 1 回派遣国ラオス首相のタンマヴォン氏の温もりと力のこもった発言であった。

次は主役である青年海外協力隊員の出番で、グアテマラで森林経営をになった河内毅君が代表して「安心・安全な地域づくりの実現を目指したい」と決意を述べた。この言葉を受け、次世代からのメッセージを都立立川国際中の高橋海輝君と長野県立伊那北高の山本一葉さんが応えた。両陛下の御退席を見送り、第一部式典は閉会。

第二部は雰囲気はがらりと変わり、帰国隊員らが主役の場面となる。「アハエデ」という民族音楽を奏でたのはガーナ派遣のメンバーとガーナ人などで結成されたカルチャーグループで、「ここはなんて素敵なおところなのでしょう!!」との意味。会場を巻き込んだ熱演であった。

パネルトークがあり、鈴木大地スポーツ庁長官を交え、マレーシアに障害者チームの水泳指導を

した峰村史世さん、モンゴルでバドミントンにたずさわった亀山明生君が体験をいきいきと語り合った。次に映画「クロスロード」の予告編上映があり、モロッコ派遣の、すずきじゅんいち監督による作品で、12 月下旬一般公開とのこと。

最終は 50 周年イメージソング「ひとりひとつ」が高橋尚子さん、乙武洋匡氏ら 7 人のメドレーにより披露され、大合唱に包まれる。そして隊歌「若い力の歌」の斉唱で幕を閉じた。

式典に参列して、「日本人に知って欲しい。私たちの心の中に、あなたがいることを」とのラオス首相のメッセージが印象的であった。

—写真提供：JICA— (会長 星野和央)

JICA ボランティア家族連絡会および帰国報告会のお知らせ

例年のように下記の内容で開催を予定していますので、是非ご参加ください。後日、詳細を会員の皆様にご連絡いたします。

日程 平成 28 年 2 月 27 日(土)

会場 JA 共済埼玉ビル(大宮駅東口 徒歩 13 分)

・JICA ボランティア家族連絡会

留守家族向けに JICA ボランティアの制度や帰国後の進路等について説明

・帰国報告会

JICA ボランティア帰国隊員による現地活動報告会で、前回同様、複数名によってさまざまな国の事情を披露

■編集後記

前号にて埼玉国際青年を育てる会が 20 周年を迎えたことを報じましたが、今度は青年海外協力隊がスタートして 50 年になるということです。半世紀の歴史は重く、盛大な記念式典も開かれます。でも、式典の日程が、今号の原稿締め切りをとうに過ぎた頃なのです。招待者も限定されています。とはいえ、この一大行事を半年後の会報に紹介するのは間延びし過ぎています。

そんなわけで、ギリギリの進行ながら、式典取材記事を掲載することになりました。執筆は星野会長が引き受けて下さいました。(山田洋)

・発行：埼玉国際青年を育てる会

・編集：広報委員会

・事務局：さいたま市浦和区高砂 4-11-17
(井上事務所内)

TEL 048-862-1234 FAX 048-862-1235

E-mail: inotai0430@skssk@gmail.com

・<http://www.sodaterukai-saitama-jica.com>